文藝ミュージカル「静」鑑賞記

Junko Higasa

三越劇場で素晴らしいものを観た。夏目漱石作『こころ』の「先生」の妻「静」のその後を描いたひとりミュージカルである。先生が命を絶ってから、果たして妻はどうなったか。漱石の考えを踏まえて想像しても、静は後を追うとは思えない。夫を偲び、自分を振り返り、そのうち時と同化して生きるだろう。それは男の厭世観と女の現実性から見ても納得の視点である。そんな人生の続きを描いたこの舞台では、導入部に漱石の好きだった落語をもってきた。程よい笑いから静を呼び出す流れが、現実の構えを取り払って心理世界への見えない扉を静かに開けてくれる。そして余談ながらさすがは越後屋、和風ミュージカルとはいえ、客席にも着物姿の女性が多い。

それはさておき、静が登場したとき、西洋風な舞台セットでありながら、私の頭の中に浮んだ背景は、江戸を彷彿させる日本橋と、漱石が歩いた善国寺前の神楽坂の通りであった。ここで「江戸っ子漱石」という言葉が心をよぎる。そして登場した静の現代的で元気なこと。「あら、静ってこんなに強い女性だったかしら」と思いながら観ていたが、今は亡き夫に語りかけながら独り飲めない酒を無理に飲むシーンに、ひたすら耐える女心を見出した時、こらえ切れず涙がこぼれてきた。元気から淋しさへの落差が一気に静の心を際立たせた。そこからいよいよ「人間として」というより、むしろ「女」として不憫な、しかし逞しい静の心を味わうことになる。

さて、その「静」役の源川瑠々子さんであるが、現代的でありながら旧式の「女」の「艶」を見事に演じる。それは漱石が好んだ「当時の新しい女性」の一要素だ。そして表情の動き・歌・日本舞踊の動き・せりふ回しと演技、どれをとっても遜色ない。それだけにすっかり彼女の世界に引き込まれた。瑠々子＝静の独特の世界である。

そして演奏と演出は神尾憲一氏。ピアノ一本でありながら豊かな音の膨らみが静の心、時代感を見事に醸し出す。歌を聴きながら「次はこういう歌詞が、こういう音が来るだろう」と予想した中に、少しだけ予想が外れたところがあって良かった。そういうところがありきたりでない音の豊かさなのだ。そしてそれを際立たせたのは音響の良さ。場面によって内面を描く時のエコーの掛け方もよかった。

そして絵を観たり描いたりするのが好きな私は、衣裳の変化にもつい目がいってしまう。見事な着付けの早変わり。着物の中にある現代風アレンジ。自然に観ているようでも視覚の中に起る色彩や形状の変化は、感覚に影響を与えている。

それから舞台セットであるが、私はシンプルが一番だと思う。そういう点で良いセットだったと思う。それに漱石作品によく登場する鏡がこの舞台でも使われていたが、静が後ろを向いたときに鏡に映った表情が見えるところは、心の深い処を垣間見たようでちょっとドキッとした。また、明かりが消えた時、天界への閉ざされた扉的ゴシック窓のシルエットが、私には寺の釣鐘に見えた。寺の風景も漱石作品にはよく登場するからだ。やはり観ながら、あらゆるものを自分側の解釈で漱石に結び付けていく。

そしてこの構成にこの女優あり。「私」が先生宅の留守番をする本文 16 章から 20 章の「静」と「私」の心理的ハードな場面もきれいに乗り切った。「先生」と「私」が出会った鎌倉の海岸という過去の罪を暴くきっかけとなった「起点」へ静を置いたラストシーンは、静の心の「ひとつの解放」と「新たな始まり」に見える。(2015.2.12)